

卒業生諸君へのことば

——自分の理性による自由な判断で——

住 谷 悦 治



大学の卒業ということは四年間に規定の科目を卒えたことで、それを担当教授、教授会そして最後に大学長によって承認されたことである。それは必ずしも各人の取得した科目の成績や在学中養成された文化的な人間的な教養とか自由にたいする理解や理性の判断の確実さとか一枚の証書では問題にしていない。卒業式で形式的に一律に学長より授与されて学園より社会へ旅立つ。その門出を前にして静かに坐して「卒業」の意味を考えて欲しい。卒業証書は学園を去るパスポートのようなものに過ぎない。場合によっては四年間の滞在証書とか授業料

完納の受取証のようなものにもなりかねない。その証書を受けずしては無事に学園を去れないから。

この世に幸いにして生を与えられた人間はだれでも自分がどのようにしてこの世に生きてゆくべきか、大学で身につけたはずの自由な意志をもって考え、どのような生き方で生涯を生くべきかの人生的態度を自からの理性によって判断しなければならぬ。困難な問題ではあっても避けることはできない。この生きることについては、自分一人が人間であるという抽象的な考えは禁物である。人間は人間であつてもその人間的存在は社会的人間

としてであるから。その社会的ということとは生を受けたこの百年足らずの歴史的環境である。その社会の歴史的现实に対決してゆくことであり、そこに人間の存在の社会的意味を求めることである。個人としての修養や悟りはもちろん重要であるが、社会的現実を無視して人間とは何であるか、如何に生くべきか、という考え方の価値は高くあるまい。たとえ天地宇宙と融合し心の中に平和と歓喜を悟り得てもそのために社会の貧困・無知・犯罪・疾病が一つでも減るわけではない。そうはいっても決して個人人格主義や人間完成を無視することではない。自己一人の利害の判断や決断によって自己の最高存在を規定してはならないということの意味するのである。共に働らく社会環境において具体的な人間と人間との関係に対して人間の存在をつかむことである。生きがいというようなこともここに問題とならう。

同志社には幸い創立者新島襄先生の遺された人生的・社会的活動の事実と訓えがある。全身に充満した良心をもって邦家に有用な働きをする。邦家とは世界にあって自主・独立・平和・中立と民主主義の日本を意味するので、そういう日本をつくることである。

徳川末期に「解体新書」の訳業に打ち込み、「蘭学事始」を書き遺した杉田玄白が晩年の著作、「形影夜話」において問答形式で十三ヶ条の人生遺言を医学生生のために語った。それは後世一般の若者への生きた体験の言葉

である。その第一問の答えに、「医に名人は稀なもの。ただひたすら刻苦努力すべきものである。努力次第でひとかどの処までは達し得られるものである」と。第三問への答えは、「万事に気を付け心に留めて活用を怠らざるこそ肝要である」と。第八問の答えには、「……経験・研究・熱心なる治療、この三つがあれば自然に心に徹する所がでてくるものである」と。一見平凡のようなこの訓言をはじめて読んだ時、わたくしはギリりと胸を打たれた。体験者の言葉は味わっても味わっても尽きぬ味がある。社会への門出に際して同志社精神・新島精神の社会的実践に就こうとする卒業生諸君の心構えとしてこれらの言葉を贈る。

(同志社総長)



真理は寒梅に似たり

松山義則

卒業生諸君。四年間の学生生活は夢のごとく去り、学業をすべておえて社会へ旅立たれる時をむかえました。心からうれしく存じます。しかし同時に、同志社大学を去っていかれることを思うと、ひとしおさびしさを憶えます。ひとりひとりかならずよき人生を送って下さい。しあわせになって下さい。諸君はいま、大きな希望や期待してまた冒険心をもって新しい職場や未知の人々の間に入っていきます。そこには危惧や不安もありましよう。あせらずにしかも勇気をもって、しっかりやってほしいと思います。

われわれが、いま、ここに生きているという事実は言うまでもなく不思議なことです。この現実のなかで、真

実に一生懸命に生きる外ありません。生きている意味をことばで答えてみても、通り一辺の人生的な答えを出してみることができるとしても、自分自身の生き方は自分で見出し、自分で体得するほかはありません。ただ願うことは自分自身にいつわりなく、自分の生涯を虚偽ではなく、真理に託して生きたいと思えます。真理は、わたくしたちの外にあって指導する原理やおきてであるよりは、自分のなかにうみ出されてくるものだと思います。「真理は寒梅に似たり、敢えて風雪を侵して開く」と新島先生は吟じられました。厳冬の身をきるような木枯のなかにたえ、枝を折るほどの雪の重みをおいながら、寒梅は清廉な姿で風雪のなかに開いています。

諸君がやりぬこうと決意した仕事を完遂し、ひとひととの交わりのなかで他人を愛していくということは決してなまやさしいことではありません。世のなかは自分にとって興味あることばかりではなく、味方ばかりではありません。生涯をかけた仕事をつづけることは山に登るようにいきたえだえになることもあります。手をたずさえてはたらく友人から裏ざられることも数多くあるでしょう。このようなときに、目標と希望とを力づよく高くかかげて気落ちすることなく、一步一步をふみしめて歩んで下さい。風雪を侵して開く寒梅のように、なにもりも忍耐です。真理に生きるための忍耐です。

学生時代は自由に奔放にものごとを考え行動できました。また学生という社会的身分のために、社会は寛容に諸君をつつんでくれたと思います。けれども今日からは社会はなんの容赦もなく要求を課し、諸君はそれに責任をもって答えていかねばなりません。自分の行為、ことば、約束はすべて責任をとらねばなりません。

このようななかであって、われわれは真理に託して光に向かつてすすみたいと思います。けれども、人間は、光にかがやけばかがやくほど、同時に黒い影を地上におとす宿命をもっています。光はつねに影をともしません。光と影という二面性からのがれられない人間性の事実を無視することはできません。光の子として明るく生きようとすればするほど、闇のくらさと直面するので

す。もともと人間は、自己主張と憎悪そして虚構からのがれることはできないのです。けれども、それゆえにこそ、他人の主張を尊重し、愛と真実に生きる意味があるとあります。理想主義は卒直端的に、闇をきらい影を拒否して、明るさと光に生きよと命じます。しかし人間の現実には自己のうちに影、シャドウ・マンをぬぐいさることはできません。己のうちに宿る影に徹すれば徹するほど、はじめて光に生きる体験の意味を知ることができるでしょう。

お互いに人間は浅はかな、ことに馬鹿げた存在です。ヒトという進化段階にあるわれわれの身体と精神のすむ世界はこのような二面性、矛盾のとりこのなかにあります。真理に生きる、生涯を真理に託して生きるということは、このような光と影の二面性のなかで、自己の弱さのなかで努力をかさね、一つ一つのりこえてゆくことだと思えます。新島先生が真理は寒梅に似たりとうたわれたお気持ちのなかに、人間性を十分に知りつくされた先生の境地をうかがい知ることができると思えます。

社会の荒海のなかに勇敢におどり出て下さい。寒梅のごとく美しく生きて下さい。この生命は人の光なりという聖句のように、諸君のひとりひとりの生涯が人の光となつて下さると信じます。

(同志社大学長)